

Title	世界的日本主義(若宮卯之助著, ダイヤモンド社発行)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.1 (1929. 3) ,p.153- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書

評

埃及紀行(天沼俊一著) (岩波書店發行)

エジプトはカイロの附近を瞥見したるに止まり、その他を見るべくしてその機會を取り遁した僕にとつて、本書は大なる興味を以て讀まれた。エジプトはアッヤでなく、ヨーロッパでもない。しかも歐亞の古代史をとくものは、何れもその文化の源をこの地に溯らせて来る。その歴史は古く、その歴史の研究は新しい。『新しい過去』(The New Past etc., by J. H. Breasted and others, 1925, Oxford)と言はるゝのも無理でない。随つてこの地に興味は惹かれ乍らも、この地をよく見てこの地のことをよく記した日本人は未だない。好矣あつたにしてもそれはあるといふだけで價値はないのであらう。

天沼氏著はす所の埃及紀行は、著者自からも言はれてゐる如く『幾多の古蹟を割愛し、僅かに四五ヶ所を大急ぎで一通り見物し、明日庵まで歸つたのである』(はしがき一頁)けれども、それだけの紀行として見ても優に立派な恐らく旅行者の通癖である偽の記事を見ない頗る眞面目の著述である。近時の進歩せる埃及學から見て、歴史的には勿論物足りない記述であらうけれども、著者序言にいふ如き『記事は頗る非學術的で、たゞどこをどう歩いて

どんな事に出會つたかを記したに止るから、毒にも藥にもならぬ。先づ汽車中で新聞紙を讀んで了つたあとか、又は床の中で寐ながら讀む程度のもの』てはない。地中海航路をとつて歐洲に旅行する邦人は必ず讀むべきである。讀者は本書によつて、エジプトの古代文化の遺跡遺物について得る所が少なくないであらうし、また滯歐中、各地博物館に於けるそれ等一部の陳列品を見たる時必ずや興味を加ふるものがあらう。

本書の中に見らるゝ寫眞の多くは、著者自からの撮影によられるものゝ複製であつて、記事にも増して異彩を放つてゐる。平素余の渴望せるはかくの如き著述である。この點に於て余は贅辭の限を盡すを厭はぬものである。

たゞ固有名詞を及ぶ限り當字を以て表現せんことに苦心せられアラビヤ語を暴夜語、アスアンを明日庵、その他拜禮島、張玲、象島などせられたことは、本書の如きに於て或は言讀すべきでないかも知れないが、それは兎に角、時勢に逆行するもので、僕は甚しく不快を催した。本邦の舶來建築語彙の譯語が特に六かしいのは、本書の著者の如き人々の仕業であるか、それとも本書の著者がそれに感化せられたのであるかも知れない。今後の新造語に對しては著者の一考を煩はしたい。(岡崎万里)

世界的日本主義(若宮叡之助著) (ダイヤモンド社發行)

若宮叢書的第一篇。菊判三十六頁。本書は先づ『世界が日本に來襲して、日本が世界に乗り出したことは、人類史に無比の大案

である。世界は日本を激變した。日本は世界を動搖した。世界の動搖は、姑く之を論外に置け。世界に乗り出して世界の一大要素と成り了つた日本は、如何なる信仰に安住して、如何なる抱負の實現を要するであらう乎。」と説き起し、徹底的なる博引傍證、快刀亂麻を斷つ如く、論じ去り論じ來つて、瞬く間に、卷末の『所謂世界的日本主義は古典的でなく、東洋的でなく、西洋的でない。世界を日本に入れて、精神的に世界を日本化せんとするの主張である』ことを知らしめる。

しかし余の本書を爰に推賞せんとするは、著者の目的とする主張その者ではなく、その主張を展開せんとする行程に於て夥多の遠見が含まれてゐるがためである。我が日本民族の國民性を産みなせる地的環境の影響を頗る明快に論斷せるがためである。多分に人文地理學的考察が含まれてゐるがためである。先づ海についての著者の考察を叩かんに、

『日本の日本たる最大特色は、日本が海の教育をあり餘る程受けて居ることである。佛蘭西の有名なる人生地理學者はいふ、日本の光輝ある迅速の發達は、精力練習の學校としての海の作用の誤解者を、單に驚かすだけであつた、と。海の生活は勇氣を要求する。その勇氣は一時的でなくて、持續的でなければならぬ。海の動作は協力を強制する。その場合に於ての勝負氣儘は、生存の機會を賭するものだ。論より證據、日本民族が、世界列強の前面に押し出されて、現に大なる責任を受け取るに至つた根本の一條件は、他の東洋民族の如何なるものよりも、海を理解する能力の秀でて居るからだ。地球の大部分は海である。海を理解するものが

全世界を聯絡して、而して全世界に大勢力を張るに至つたことは決して怪むべきでない。(中略)海は日本の寶である。日本は海に依つて自然に獨立が保たれて居る。日本は海に依つて全世界と自由に通ずることが出来る。日本は島國の資格に於て、而してその絶對的獨立の條件の下に、一たび吸収した大陸文化の精粹を、完全に保蔵して日本的に發達させる機會を得た。所謂日本民族の獨立性は斯くして次第にその内容を豊富にしたのである。』(一五・六頁)

統一と實行力の源泉を海に求めた著者は更に語をついて、變化力の源としての山を説く、曰く、

『日本民族は海の教育を思ふが儘に受けて居る。同様に、日本民族は山の薰陶を飽くまで體得して居る。若し海の勢力が、日本人の實行力の展開に少からず作用して居ると謂へるならば、山の感化は、その民族の多能性を至上限に涵養して居ると觀るべきである。一科の社會科學として人間社會の説明と指導とに多大の光明を投ずるであらうといふ人生地理の研究は、不幸にして今も尙ほ十分な足場を日本學界に占めて居ない。此の學問は、普通の所謂地理學者の手に餘るものだ。同時に普通の所謂社會科學者の能力を超えるものだ。自然と人間との研究を社會的に綜合するの力量を待つて、始めてその進歩を圖ることの出来る學問である。一切の社會研究は、一先づ此の研究の上に立つべきである。何となれば、人間の社會に、人間と地上との關係を完全に離脱した事實があり得べきでないからだ。彼の多くの英語に慣れた人に依つて宣傳されて居る國際主義の如き、多くの獨逸語に傾いた人の爲め

に駁されて居る所謂共產主義の如きも、此の人間と地上との關係を無視した一點に於て、殆ど今日の思想ではないのである。歐洲十八世紀以後の思想上の層を知る者は、社會生活が、包括的に觀るべきでなく、個別的に扱ふべきであることを一度は心得て居るべき筈だ。遺傳の研究、個體心性の研究、及び之に附隨した各般の研究は、個體及び集團の特徴と環境との關係を少からず闡明して居る。同じく人間であるといひ、同じく東洋人であるといひ、同じく日本人であるといふだけで、その間に齟齬する個性的差異を滅却せんとする者は、二十世紀の世界の思想を知らない者だ。一個體としての日本民族の特徴を、他の民族の特徴と異ならしめた主なる環境力の一は、實に日本の山である。』(二二—二二頁)と。頗る味ふべきの言である。

本書は、要するに、大なる思想を小なる頁に横溢させたる近來の快著快文字であつて、所謂保守的國粹主義者、日本主義者の論説とは大に趣を異にするものがある。近代思想は本書に咀嚼せられ、言々句々、みな精魂を宿すが如くであつて、讀者をして思はず快哉を叫ばしむる底の著述である。代價僅かに三十錢。(間崎万里)

~~~~~  
**Profillet (Abbé): Le Martyrologe  
de l'Eglise du Japon (1549—16  
49) Paris, 1895—7, 3 vol.**

書評欄は多く新刊書の批評紹介に充されてゐる。ところが之は

書 評

また餘りに舊刊に屬する。併し、何故かこの書はこの一二年來、私の目に觸れるベリーにある古本屋(多く東洋關係の書籍を扱ふ)の目録には毎回見かけ、價も四六判型假綴三冊もので僅か四五十フラン(邦貨約四五圓)の極めて廉價であり、たま／＼注文狀を發してといたものを見れば、何時も新しく折目が切れてゐない。(私は知人のために二部とつたが、兩部とも折目が切れてゐなかつた)されば、舊刊といふものゝ得難き珍本といふ譯でなく、それが、時節柄便利な本であつて見れば、敢て紹介の勞をとるのも不可はないであらう。

題して『日本教會の殉教者列傳』といふ。著者プロフィール師のことに就いて詳しく知るところはないが、表紙の名の下に“ancien Annuaire de la Flotte et de l'Armée”と記してあるところより、何か陸海軍の御用宣教師をつとめたことのある人であることが知れる。

島原亂後、鎖國のために、日本の切支丹教徒と母教會との連絡は絶えてしまつた。ヨーロッパに於けるカトリック教國、殊に十七世紀以後政治的に有力となつたフランスは、常に所謂『公教會の復活』を望んで居つたので、その努力の一つのあらはれは日本の歴史や語學の研究となり、他のあらはれが幕末に於ける眞の『公教會の復活』を實現するに至つたベリー外國傳道協會の活動となつた。前者の日本歴史研究といふも、それは單なる歴史研究のための研究といふよりも、<sup>たゞ</sup>稀なる赫々たる日本の切支丹史迫害史殉教史を詳しく究めて心ある者の發奮を促さうとしたものゝ如くであつて、その上はソリエー François Solier より、クラッセ